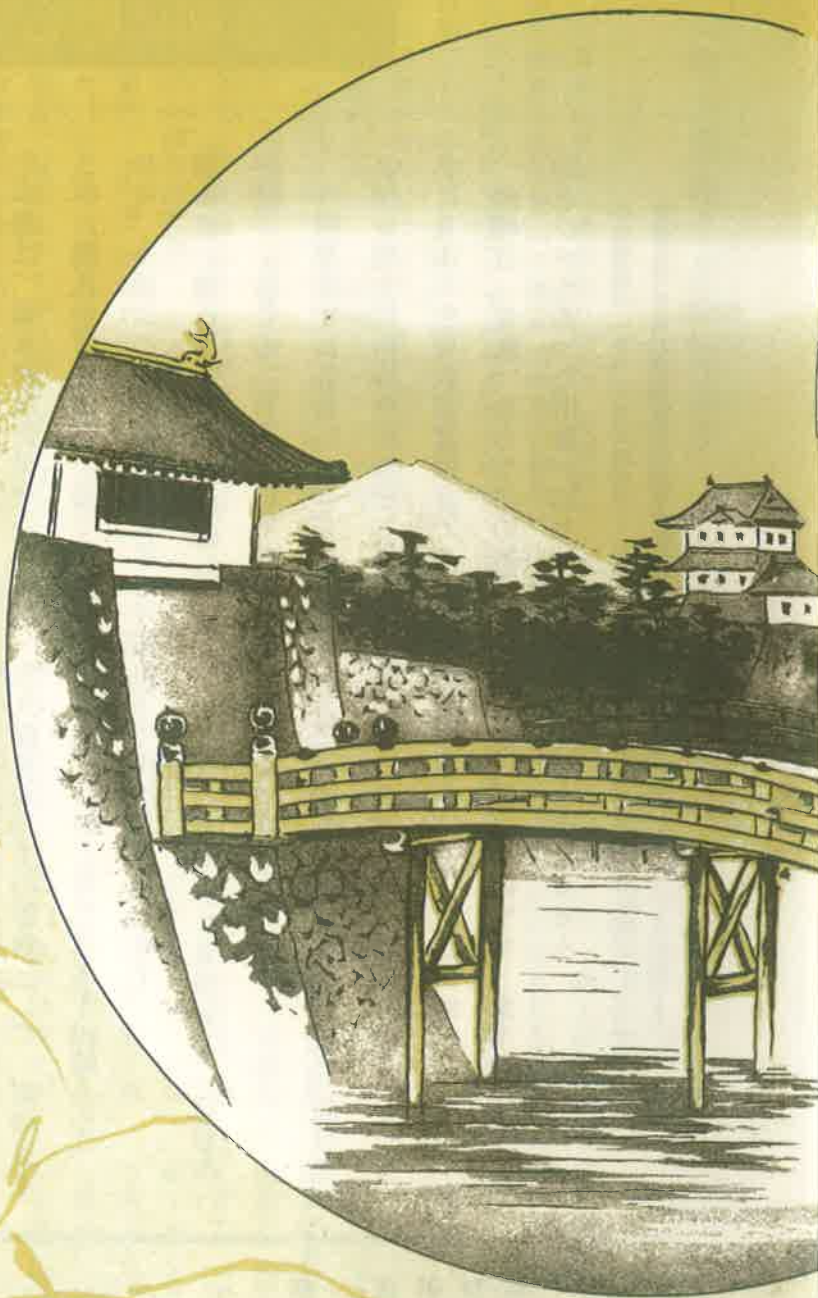


同 方 會 誌

江戸を生き明治をつくった旧幕臣たちが
先祖と自らの足跡をまとめた記録集！



全十卷



マツノ書店

または、江戸っ子が書き、語った
あの町、あの坂、あの橋、そして
暮らし、あそび、人情など……、
だれも知らない幕末江戸百科！



- ①表紙は題字以外の背景の色を巻ごとにそれぞれ変えます。いずれも渋く落ち着いた日本の伝統色です。
- ②背表紙にも一工夫あり、書齋に並べると「葵の御紋」が大きく浮かび上がることでしょう。どうぞご期待ください。
- ③本書は15号までが「同方會報告」、それ以降は「同方會誌」です。

 マツノ書店

☎745-0032 山口県周南市銀座2-13 TEL0834-21-2195 FAX32-3195
<http://www.matuno.com> E-mail info@matuno.com

復刻に際して

■小社は平成十五年に『旧幕府』（全五巻）を復刻して大好評を博しました。この『同方会誌』（全十巻）はその姉妹編にあたり、より具体的には「江戸を生き明治をつくった旧幕臣たちが、先祖と自らの足跡をまとめた記録集」ともいえる内容です。

会誌として作られたもので発行部数はごく限られており、誌名が抽象的なこともあって、これまでほとんど知られていませんでした。

■明治二十九年から昭和十六年にかけて刊行された全六十五号を十巻にまとめた本書は、幕末維新史研究の大御所・大久保利謙先生の監修として、昭和五十二年に他社から十万五千円で復刻されました。しかし今では入手困難となっております。小社はこのたび同書をその半額以下で再復刻いたします。

■本書の難点は、各巻に「通しノンブル（頁数）」と全巻を見渡せる「総目次」が無く、各号の「目次」には頁数の記入も無かったことです。

今回小社では各巻に「通しノンブル」を振り、新たに「別冊」として「総目次」と国立歴史民俗博物館教授・樋口雄彦氏による充実した「解説」および「三九名に及ぶ」「主要執筆者紹介」をセット致します。

装幀は「並製」ならではの軽くて丈夫で扱い易いものです。全十巻で厚さ38センチもあつた旧版が23センチとなり、場所も取りません。

小社独自の「キャンセル自由サービス」も健在です。浩瀚な内容を一冊のパンフでお伝えできるわけもなく実物をご覧の上、不向きの際はお返し下さっても結構です。

「同方会誌」の存在価値

紀田順一郎

旧幕府出身者の親睦を目的に、実歴談や論考発表の場を兼ねた雑誌『同方会報告』（のちの『同方会誌』）が創刊されたのは、明治二十九年十一月であった。この種の雑誌は同誌が最初ではなく、まず明治二十一年に『維新史料』と『開国史料』が出現、ついで『江戸会誌』（二十二年）、『名家談叢』（二十八年）、『旧幕府』（明治三十年）ほか相次いで創刊され、雑誌以外には東京帝国大学史談会の『旧事諮問録』（二十四年）や『史談会速記録』（二十六年）が加わり、ブームの感を呈した。とくに『同方会報告』と『旧幕府』の場合、旧幕臣がすでに頽齡期を迎えたという事情が背景にあった。ちなみに明治二十九年という時点では、栗本鋤雲の七十五歳をはじめ、勝海舟が七十四歳、大鳥圭介が六十四歳、榎本武揚が六十一歳、徳川慶喜が六十歳（いずれも数え年）という年齢である。

維新後半世紀の大正時代の半ば、政治家でジャーナリストの島田三郎は、榎本武揚ら反乱勢力が結果的に隠忍自重したのは大局を鑑みたからであるとし、「時人が指弾を蒙らず晏如として新政府に仕えたる人々も、脱走者と感慨を二三にせるにもあらず、民間の事業に就きし人々も国家の前途に囑目するに同異なし、幕人の上下を通ぜる一致点の存せるは後人の一考を要すべき所なりと信ず」（『新政府に対する幕人の思慮』『日本及日本人』一九二七・九）とした。つまり、新政府に出仕した人も、武力で反抗した者も、国を思う一念では同じで、旧幕人が上下こぞつて一致していたことは、後世の人に高く評価されてもよい、という意味である。

五十年という歳月を経て、維新が歴史となった時点での《整序された結論》であり、いわばタテマエである。ここに至るまでの過渡期の旧幕臣たちには、濃淡こそあれ、出自としての旧幕への捨てがたい感情が蟠っていた。福沢諭吉の『瘦我慢の説』は明治二十四年の脱稿、三十四年の発表だが、明治体制の基礎が固まるにつれ、勝海舟や榎本武揚ら旧幕人の行動にメスを入れる機運が生じたことをうかがわせる。このような空気をより端的に示すものが、同方会の若手だった蜷川新（法学者、外交官）の激烈なる海舟批判である。



■体裁 全十巻＋総目次（分売不可）
A5版並製 計五二四〇頁

■定価 7万円（税込・送料別）

■予約特価 5万円（税込・送料込）

■特価締切 23年7月22日

■発売 23年9月上旬

▼書店不卸 ▼締切厳守 ▼返本OK

山口県周南市銀座2-13
0834-21-2195

マツノ書店

『同方会誌』という歴史

作家 秋山香乃



江戸時代の男の子は、腕白坊主の悪戯好きで、なかなか手ごわい。武士の子も例外ではない。蜻蛉捕りはよく聞くが、蝙蝠捕りもしたらしい。白壁、黒塀を見ると「手の届く限り」の落書きをしなければ気がすまなかったようだし、板塀があると手作りの手裏剣を投げて遊んだのだとか。落とし穴はもちろんのこと、生い茂る草を結んで輪っかを作り、人を転ばせて遊んだり、泥で作った煙草入れを月夜の道路へ置いて、大人が拾って手を汚すのを楽しんだり、今ではめっきり見られなくなった遊びのオンパレードだ。

中でも壮観なのが、炮烙訓練や子供喧嘩と呼ばれる戦ごっこだ。数十人も集めて広い原っぱの中で大がかりにやったのだとか。時には武家と町人に分かれて戦ったらしく、青竹と石礫の武器を手に、いっばしに鯨波を上げ、勝つと履物や棒きれを分

捕った。恥ずかしながら勉強不足で、武家の子と町人の子が交わって、そんな大がかりな戦ごっこを楽しんでいたなど、『同方会誌』を読むまで知らなかったものだから、なにやら意外な気がして目を瞠った。

同誌には、こういう「へえ」と声を上げたくなるような興味深い当時の生活が、随所に紹介してある。当時とは、江戸時代から戦前の昭和までの長きにわたる期間のことで、頭から終わりまで順繰りと同誌を捲っていくと、貴重な風俗史そのものとなる。

ことに江戸時代について書かれた記事に関しては、書き手の方も自分の見知った「江戸」が人々の生活や記憶から完全に消え去る前に、後世になるべく伝えたいと情熱を傾けたことを見て取れる。それだけに読み物として楽しめるだけでなく、史料としてもずいぶん貴重な証言が散見し、江戸好きにはたまらない本と言えるだろう。そうはいっても人の記憶は曖昧だ。書き手の勘違いや記憶違いも当然のように生じてしまう。すると、記事を読んで間違いに気付いた別の会員が、すかさず訂正を入れるのだ。妥協はない。そのやり取りも、雑誌ならではの面白い。

それでは具体的に冒頭で触れた子供遊び以外、どんなことが紹介されているのだろう。例えば、江戸は坂の町だが、東京になって消えた坂も少なくない。江戸のころにどこにどう

いう名称の坂があり、その名の由来や坂の途中には何があるのだ、などということが、思いつく限り紹介してある。これはぜひ、地図を持ちだしてペンで記入しながら読んで欲しい下りである。あるいは、奉行とはこういう人たちでした、与力とは、同心とは、中間とは、自分の勤めた何某とは……などと、御役や組織について詳しく説明されている。はたまた江戸時代の処刑の真実など、そのほとんどが、伝聞ではなく直に見たり体験したりしたこととして掲載されている。それで、旗本の傘は白張りだったとか、中間の桐油の合羽は赤か黒だったとか、やけに細かいことまで記されているのだが、桜田門外の変の際に、討ち手の水戸浪士が中間に化けて待ち伏せていたから、みな赤合羽を着ていたのだという下りは、今の感覚からいくと雪の中の赤合羽が目立って仕方がない気がするが、当時はそれで紛れることができたのがいかにも意外で、こういうことは書き留めてくれない限りは、想像しただけでは思いもつかない情景なのである。

他にも、桜餅は文政のころ隅田川辺で作られるようになったのだというような、ものごと始めなどもたくさん載っている。銭湯の二階番や茶屋小屋の給仕、商家の見世番などは、元々中年男性の仕事だったのが、妙齢の娘にとつてかわったのはなぜなのか、という理由は思わず笑ってしまうようなものだし、足軽から勘定奉行まで上り詰めた人の話も圧巻だ。

昌平校の子供たちの素読吟味の記述では、練習しすぎて嘔れてしまった声を滑らかにするために、ナメクジを呑んでまで頑張る健気さに、昔の子らの真摯な姿勢に胸を打たれる。江戸時代の白づくめの葬式の記事には、今のそれとのあまりの違いに、興味が尽きない。逆に、七夕の行事に心躍らせ、白蟻の駆除に頭を悩ませる下りは、今の私たちと変わらぬ楽しみや悩みを親しみを覚えるだろう。江戸詞に吉原詞、流行唄や落書の類まで、かなり詳しく紹介されているから、まるで当時の生活を覗き見しているような楽しさを覚えるのである。

むろん、『同方会誌』に掲載されているのは、風俗だけではない。誰もがよく知った歴史的事件についても紙面を割いている。そこで同方会の会員は言う。明治になって伝えられている幕末史は、勝った側の作った一方的な視点で描かれており、負けた側の幕臣たちを呼んで行われた史談会でさえ、政府を憚って真実は語られていないと。そうして幾分誇らしげに彼らは言う。明治政府からは、「官軍・賊軍」という言葉を使って薩長方と幕軍方を表現しよう命じられたが、会員の中根淑が気魂をもってこれを拒否し、明治の初めには「西軍・東軍」と表記して本を出版したのだと。

だから、全員がそうではないのだろうが、なるべく意識して幕府側視点からの歴史を「本音」で語っていかうとした意気込みが、同誌には見られるようだ。そうはいっても、歴史

を動かした側の薩長の者たちに訊かなければ、明治になって振り返っても本当は何が当時、進行していたのか、自分たちにはその全貌が見えないのだと認めているところも、興味深い。さらに、幕臣というものは体制側に長く居たせい、のんびりとした気風で、薩長への恨みごとをチクツと述べても、どこかおおらかで、江戸っ子の面子にかけてもユーモアで覆って悲壮感を見せぬ語り口は、読む側としては重すぎず、実に有難いものなのだ。

歴史的対象については、江戸幕府開幕に繋がる戦国の歴史から掲載されている。それはキリスト教との関係と絡めて捉えられ、書き手独自の解釈も光り、十分に読み応えのある記事に仕上がっているが、体験談として書かれてあるのは、やはり幕末史からということになる。歴史的事項についての体験談は、たいてい裏話的要素が語られるのが常だから、ぐつと話に引き込まれる。

具体的には、ペルリ来航以降の外国人使節を応対する様や、不平等条約を結んだとして不評を買った和親条約及び通商条約における大老井伊直弼の功罪、それに関連しての安政の大獄や桜田門外の変、幕府斜陽と將軍家の動き、薩長に新政権樹立を許した戊辰戦争。敗戦と投獄。そして釈放。明治以降の日清戦争や日露戦争、万国博覧会への出席についてなどだ。井伊直弼については勅許のない条約の調印と安政の大獄の

断行のせいで否定的に書かれることも多いが、当会が元幕臣やその子孫をもって組織した会というだけあって、さすがに別の解釈で捉えられている。中には幕臣とは無縁の佐賀の大隈重信の寄稿もあって直弼を存分に擁護してあるが、これが大隈の気質そのままに、ずいぶん舌鋒で小気味がよい。また、外国側と日本側が交渉を行い始めた当初、商人が通訳に当たったため、不都合なことは捻じ曲げて互いにとつて都合のいい言葉のみを伝えていたことから、正しく意思の疎通ができなかったという話などは、いかにもあっただろうと頷けるではないか。

戊辰戦争では会員の性質上、彰義隊の上野戦争についてもっとも詳しく、あの激しい戦いの最中、喉が渇いて仕方なく、酒で潤しながら戦ったなど、体験していないと思っても付かない告白が、新鮮な驚きとなって印象に残る。なるほど、日本史上かつてなかった戦法のため、短時間に大量に消費された火薬で喉が焼けたのだろうか。また、十五代將軍慶喜が鳥羽・伏見の戦いの後に大坂城を脱出したとき、城の奥がもはや蛇の空になっていることを知らない榎本武揚が、石炭買い入れ資金を貰いに伺うと、五万両ほどが捨ててあったから拾って軍艦に積み込んだ話など、読み物としても目を細めて楽しめる記事が随所に散りばめられている。

また、同誌全号を通じて幕府海軍の歴史が詳細に語られる

様は一読に値する、他に類を見ない貴重な史料となっている。

歴史的事項だけでなく、幕臣たちや幕府に関わりの深い人物の伝記やエピソードも、本人、あるいは子孫や知人によって語られており、その数は相当なものがある。有名な人物で言えば、榎本武揚、大鳥圭介、伊庭八郎、伊庭想太郎、中根淑、近藤勇、土方歳三、中島三郎助、佐久間象山、勝海舟など。同誌でしか読めないエピソードが掲載されている人物もいて歴史好きの心がくすぐられること請け合いだ。一番紙面を割いているのは、やはり將軍家だ。ことに慶喜については詳しく、元氣いっぱいだった子供時代から生き生きと語られているので、興味のある人はぜひ手に取ってみたい。

明治から戦前の昭和にかけて編纂された雑誌だからだろう。海外の体験記も多く載っている。今のように情報の溢れている時代ではない。海外のことを知るには、自分で直に行つて体験するか、体験談を聞くか、読むか、するしかない。当時の会員たちが、どれほど熱中してこれらの記事を読んだか容易に想像がつかないか。オランダ、ドイツ、アメリカ、イギリス、フランス、ロシア、今の中国に韓国、インド、ニューカレドニア……。アイスクリームの初体験、ダイナマイトを使った漁、リングの街路樹の収穫が道路普請の資金になっているドイツの賢さなど、それら全てに体験者たちは瞠目し、書き綴ったのだ。

『同方会誌』には、文芸の投稿も載っている。そのときつらつらと考えていたことを綴ったコラムのような記事も載っている。真の幸せとは何ぞや、と真剣に考えている記事や、「人」という文字について延々と解説してある記事や、東京人がひと夏に消費して汗に変える氷の量を計算してある記事、経済学が発達していかなかったゆえに、過去に日本がいかほど世界の中で損をしたかを力説する記事など、当人だけが拘りに満ち満ちた記事の数々も、それなりに楽しいものだ。

同誌は雑誌なので、雑多な印象はどうしても免れない。全ての記事に全ての人が興味を引かれ、満足を得ることは、とうてい約束できない。だが、前政権の関係者の、本来は消えてなくなるはずだった生の声を綴って留めた同誌は、人の数だけ想いがあることを私たちに伝えてくれる。雑多ゆえに会員たちの息遣いまでも生々しく伝わってくるのである。必らず心にすんと落ちる記事が紛れていることは保証したい。歴史とは元々人々が雑多に積み重ねていった意図せぬ時間の流れであって、決して綺麗に分類整理できるものではないのだから、『同方会誌』は歴史そのものなのである。

マツノ書店の『同方会誌』復刻

ブログ「山と蟻の間」より

マツノ書店さんの今年の復刻予定葉書に印刷された文字『同方会誌 全十巻』。これを見て、仰天された方も多いのではないかと思います。どこまで幕末明治ファンの懐を寒からしめるのだろうか、畏怖しました。数は少なくとも、ファンや研究者からは喉から手が出るほど欲しい需要に答える。その姿勢に敬服です。歴史という学術分野で実質的に貢献する方針を貫き、大衆に受け数が売れば良いという資本主義とはベクトルを全く異にしておられます。「売れる本に良い本は無い」と、土木学会で有名な教授が仰っていました。自分の本が売れない言い訳であるとの笑い話でしたが、真実を突いています。その意味で、マツノ書店さんは真に「良い本」を追求しておられると存じます。

『同方会誌』は、その希少さからファンの垂涎の的でした。同様の旧幕臣団体の雑誌である『旧幕府』などは、ある意味知れ渡っています。『旧幕府』は様々な文献で引用されているので、その名を目にする機会は多く、図書館でも県立など

の決議を以て賛成員とす。但別に会費を要せず。本会は明治二十八年の設立に係り、榎本子爵を会長に推戴し、現今賛成員四十三名、会員殆ど二百名を有す」

同方会は、明治二十八年設立の、旧幕臣の子孫の「社交クラブ」でした。いかに名声が高くとも旧幕臣、あるいは旧幕に「特別の縁故」がなければ仲間には入れないという性質のものでした。なお、設立時の誌名は『同方會報告』であり、後に『同方會誌』と改称されました。ここでは『同方会誌』に統一して表記します。

現在同方会は、「江戸会」、「旧幕府」、「旧交会」など一連の幕臣互助組織の一つとみなされています。それらは、江戸時代よりのわが国固有の制度・文字・風俗・美術などを破壊した明治政府を批判するものであり、時勢に対してのささやかな抵抗の意思を表明したものであると、論考などで述べられることがあります。

一方、そうした後ろ向きな姿勢ではなく、旧幕臣たちが過去を土台に時代と向き合い、世の中の要求に切磋琢磨して答えていく姿が、『同方会誌』などからは読み取れます。『同方会誌』には、旧幕臣の明治・大正社会における諸活動成果、江戸時代で後世に伝えるべき文化、幕府の有用な行政経験、

でお目にかかれます。しかし『同方会誌 全十巻』、これは、所蔵している図書館を探すだけで一苦勞でした。東京では三箇所の図書館にあります。多くの場合は禁帯出です。

『同方会誌』は、幕臣の社交会である団体の機関紙です。「同方会要旨」として、明治三十年三月号には以下の通り説明があります。

「本会は旧幕臣の子孫を以て組織し、十六年以上の者は業務の如何を問わず入会を許す。現に博士学生軍人官吏実業家操觚者ありて完善なる一の社交倶楽部なり。本会は交互知徳を研磨し友誼の親密を謀り、兼て吾人の風気を發揚するを目的とす。故に年二回宴を開き、三回茶話会を催し、且、数回報告を發刊して諸君に頒つべし。本会員は在京地方の二種に分ち、会費として在京会員は毎月七錢、地方会員は半箇年分二十四錢を前納せらるべし。但、宴会費用は出席者より徴収す。本会は旧幕臣若くは旧幕に特別の縁故ある者は幹事会

混乱期・戦中を生き抜いた記録など、現代から見ても史料価値の高い記事が多数収録されています。各記事からは、当時の旧幕臣の方々の素養の高さ、社会的責任感の高さ、そして時代を前を向いて生きていく姿勢の正しさを感じます。古今東西、国の発展は、過去を土台に先人の遺産を引き継いで成し遂げられてきました。国家運営の経験とノウハウが断絶すれば、国土開発は停滞します。旧幕臣は、幕府時代に培われた素養、専門知識、技術力を国運営のリソースとして明治政権に投入しました。それが近代日本の土台の一つです。『同方会誌』は、勝者の薩長政府と敗者の旧幕臣という単純な二面構造によって語る歴史観への、格好の反論材料になるのではないかと思います。

そうした点を脇に置いて、『同方会誌』の一つ一つの記事の情報量は素晴らしいです。例えば、会員の方が亡くなった場合、追憶記事ということその方の小伝が語られます。武鑑や旗本事典など様々な資料を重ね合わせないと見えてこない経歴が、一括でまとめられている事もあります。貴重な伝記資料です。幕臣を一人一人丹念に追いたい方には、まさにバイブルと言うべきでしょう。同方会誌の「異動」欄も、重宝します。会員の転居や入会・脱会・改名、住所、訃報について、毎回収録されています。これにより、旧幕臣の会員の行方について判明する事項が多々あります。

各記事については、例えば、戊辰・箱館戦争関係者が関心の対象の場合、以下の記事が注目されるでしょう。(旧字は現代文字に置き換えています。)

丸毛利恒氏彰義隊戦争実歴談抄
本山漸氏佛教の所感
故小菅智淵君小傳
幕府軍艦開陽丸の始末
開陽丸に於ける勝安房と榎本和泉守
故沢太郎左衛門氏の略歴
佐久間貞一君を悼む
故沼間守一氏
林(董)公使の清国談
武田成章氏の三浦見聞誌
維新前の大坂城の結構
大鳥圭介翁と写真術
本多晋 維新前後の経歴段
幕府の軍事教育
戊辰上野戦争の日
碧血碑の祭典と榎本武揚
日本倶楽部の林董大使招聘会
明治二年俘虜となりし林董子

榎本子爵懐旧の涙
戊辰伏見戦争談
略譜 天野可春
故松本順男の寛量
如楓家訓 男爵大鳥圭介
戊辰伏見戦争談に就て
豆州途上懐故江川坦庵
大鳥如楓男の別墅
噫會長榎本子爵薨
昔を偲ぶ彰義会
松平太郎逝
故榎本子追弔建碑式
荒井郁之助翁述懐
故榎本子爵一周忌
中島三郎助君肖像及筆跡
傑士中島三郎助君
中島三郎助君招魂碑
箱館戦争の軍資
荒井郁之助君墓碑銘
「大鳥圭介傳」成る
故榎本子爵の談話に就いて
函館砲台止戦顛末記

伏見鳥羽東軍戦死者五十年招魂祭
往年を追想して上野戦争に及ぶ
欧式海軍創設時代の追憶
気概ありし天野可春翁

その他、幕末外交に関心があれば、「旧幕の仏蘭西語学校」
「幕末の人傑 岩瀬肥後守と水野筑後守」「巴里万国博覧会に就て」「合衆国政府の遣日使節記録」「欧航徒然草」などが目を引きます。「妻木式コルバルワニス」「石炭の経済に就て」など、科学技術分野で活躍する構成員の姿が窺えます。また、大鳥圭介の長男大鳥富士太郎による「渡欧回想談」など第二世代ともいえる幕臣の子息で各界に活躍する人物の経験談なども収録されています。石橋絢彦の名著「沼津兵学校沿革」「沼津兵学校職員伝」は、幕府人材を明治政府に引き継いだ沼津兵学校研究には欠かせません。

一次史料とされる記録も多く、後に別の形で復刻されているものも多々あります。同方会誌から旧幕府に転載された記事も見られます。根拠を同方会誌に拠れば、研究としての信頼性は担保されるでしょう。

一方、小さな記事などはこの同方会誌でしか確認されないものも多いです。会員の方の詩文や異動記録などもそのひとつ

つです。また、復刻の過程で削ぎ落とされてしまった貴重な記録も多々あります。例えば、「大鳥圭介獄中日記」の登場人物のその後を注釈として記した「丸毛利恒補注」などはその最たるものでしょう。丸毛の補注により明治期の動向が判った箱館戦争参加幕臣も多くいます。

このように、この雑誌自体が、歴史の証人と言えるかもしれません。「良い本」の極みと言えるでしょう。

その同方会誌を全十冊、復刻に踏み切ってくださいましたマツノ書店さんの在る西の地を拝む思いです。復刻を心より楽しみにしております。

ブログ「山と蟻の間」より、改

小社では平成二十二年の賀状で「ご希望が多ければ本書を五万円で復刻」と予告しましたが、その後丸一年どころからも反響皆無のため諦めていたところ、あるお客様の知らせで本年一月このブログを拝読しました。

そこには、これまで私が思っていた通りの本書への評価が躍動する文章でしかも客観的に描かれており、同時に本書の復刻を小社へ熱望しておられます。

専門家でもない人がこんな文章で表現するような本であれば、絶対に間違いなく一定部数は大丈夫と感激した私は、即復刻へと踏み切ったわけです。

本書復刻への記念すべきブログとして、本人による若干の修正のうえここに掲載させて頂きます。

マツノ書店 松村久



幕末〜明治に生きた旧幕臣たちの絆と視線

幕末史研究家 西澤朱実

明治維新とそれに続く急速な近代化は、「立身出世」の風潮を生み、大都市圏、とりわけ東京への人的移動を促し、結果、ヒト・モノ・カネが集中する「中央」と取り残される地方という、現代日本にも通じる二極化の構図を出来させた。そうした時流の中、さらに二重三重に分断されていったのが、戊辰戦争の敗者としての旧幕臣たちである。

かつて四百万石の家禄と国内最大の家臣団を有した徳川將軍家は、慶応四年五月、静岡藩（駿河府中）七〇万石に減封され、数万に及ぶ旗本・御家人のうち、「藩士」として新封への移住を許された者は一万五千人にすぎなかった（『海舟別記 巻一』）。この人選は当然ながら洋学系の新知識人や技術者が優先されたため、二六〇年続く「徳川の平和」に安住していた殆どの幕臣は、この折、武士とし

方のバイブルとされる編纂物との関係である。同方会では、自らの会誌を会員の現況報告を主眼とするものと位置づけ、幕末史料の蒐集・記録については、ともに会員の興した『旧幕府』や『江戸』に期待する傾向があった。殊に『旧幕府』との間では、記事の転載はほぼ無条件に認められていたようである。両誌に重複する史料のうち、「彰義隊戦争実歴抄」「彰義隊発起顛末」等は『同方会誌』が初出、また大鳥圭介「獄中日記」は『旧幕府』への掲載が先行したものの、同誌に未収録の部分を含めて『同方会誌』には全編が発表され、前者を補完する形となっている。『江戸』創刊の折にも、発行元である江戸旧事采訪会への史料提供が『同方会誌』上で呼び掛けられているように、『旧幕府』『江戸』と『同方会誌』は、扱う記事内容によって「今」と「過去」を棲み分けつつ相互に協力し、三誌でひとまとまりの史料とも言うべき関係を有していたのである。

実際、『旧幕府』と『江戸』の掲載史料に登場する戊辰従軍者のうち、旧幕臣のその後は、『同方会誌』の小伝や「彙報」によって

て仕えるべき主家（自らの帰属先）とそこから支給される家禄（生活の糧）を同時に失い、大量の浪人と化した。一方、静岡藩士として残った旧幕臣たちも、明治四年の廃藩置県によって徳川家との絆を断たれ、現地に土着する者と新政府の招聘を受け静岡を去る者へと分裂してゆく。

『同方会誌』の発行母体である「同方会」は、これらのうち、富国強兵・殖産興業の国家的ニーズに即戦力たり得た静岡藩士の第一世代、また新たに身につけた教育を武器に世に出た第二世代を中心とする、主に東京在住の旧幕臣たちによって結成された親睦団体の一つである。

明治二八年六月に発足した会は昭和十六年末頃まで続き、榎本武揚と江原素六が会長を務めたほか、大鳥圭介・丸毛利恒ら戊辰戦争相当部分を追跡することが可能である。たとえば箱館戦争で籠城中の弁天台場と五稜郭の間を奔走した川村録四郎（久直）なら、既に退官していた明治三一年、六四歳の時に、いわゆる榎本植民団の現状視察のためメキシコへ向かい、五月に帰朝していること等が確認できる。とりわけ会員個人の職務上の異動から卒業や冠婚葬祭に至るまでを広範かつ詳細に伝える「彙報」は、ある意味、会と会報の存在意義に関わるものだった。そこに記された個々の足跡は、維新で生活基盤を失い第二の故郷たる静岡からも隔てられた上、「徳川の孤児」として異郷に生きねばならなかった旧幕臣たちの分断された生そのものであり、失った地縁血縁に代わる新たな絆コミュニティとして彼らが見出したひとつの形が、「同方会」と『同方会誌』だったと言えるだろう。

また、四年に満たない存在ながら、静岡藩の英知を結集し、近代陸軍や学制の礎となった沼津兵学校・静岡学問所の詳細が初めて記録されたことは、本誌最大の功績である。このほか、「林董伯自序回顧録」「山内堤雲

従軍者や、島田三郎・赤松則良・前島密など静岡藩を代表する著名人が会員・賛成員に名を連ねた。同時期、在京の旧幕臣系親睦団体としては、同方会とも交流のあった碧血会・旧交会・田安旧誼会・一橋会・葵会等が認められるが、いずれもその実態は詳かでない。会報の発行という明確な活動成果と、そこに掲載された記事が後世の歴史研究の需要に応え得る内容を備えていたこと、入会に際しては紹介者を必要とし、親子・兄弟で会員となる者もいるなど相互交流が深化する傾向にあった点で、他会に比べ同方会が突出していたと見ることができよう。実際、在京と地方の両会員を合わせた総数は、発足時に二〇〇名弱、中期の大正九〜一〇年には五〇〇名に達し、最末期の昭和十六年でさえ三七〇名が在籍していた。

その会報である『同方会誌』は六五号まで現存し、「山ノ手談話会」「彰義隊会」や評定所の旧吏員による「辰の口老友会」等が分科会として活動していた。注目すべきは、『旧幕府』（明治三〇〜三四年）・『江戸』（大正四〜一〇年）といった、今日幕末史研究に於て一

翁自叙伝」「赤松則良半生談」に代表される「第一世代」の未発表手記類、三国干渉の舞台裏を語った大鳥富士太郎「渡欧回想談」、満州国の人や暮らしを实見した小林量造「事変下の北京」といった肉声から、テニスやビリヤード等の片仮名スポーツの流行に戸惑うエッセイ「秋宵閑話」、会員の折々の詠草など、幕末から昭和へ続く激動の政治史と個人史がここに混在する。純粹に史料に特化した『旧幕府』や『江戸』に比べ、その記事の多

彩さ・時間軸の長さが逆に『同方会誌』の印象を散漫にするが、近現代を貫くマクロ目線の傍証として、幅広く研究に資するものと思われる。今日、『同方会誌』については、所蔵する図書館の少なさを嘆く声が所々に聞かれる。『旧幕臣』という限られた対象を会員としたため、ともすればその史料的価値も限定的に見られ、これまで一部の地域・施設にしか備えられて来なかった本書だが、今回の復刻により全国の多くの研究者や歴史ファンの目に触れ、今後様々な場面で活用されることを願ってやまない。

『同方会誌』の寄稿者たち

国立歴史民俗博物館教授 樋口雄彦

誌上では、特定の史観に対する批判が吐露され、史実をめぐる論争が引き起こされたこともあった。歴史観に関しては、以下のような例を拾い出せる。

田辺太一が、史談会（明治二年島津・毛利家などを中心に設立された半官半民的維新史料調査機関）に出席した諸藩出身者が口をそろえて自分の藩は勤王だったと主張し、真実の歴史を明らかにしようとしなかったことを批判したこと（第七号）、本多晋が、井上馨邸の門に芝増上寺あたりから流出したらしい葵紋の木彫がはめ込まれていることを「奇態」とし

て軽蔑したこと、同じく本多が、日光東照宮は徳川氏の諸大名に対する強権によつて建設されたものだと言言した佐佐木高行に対し、王道と霸道との違いを知らぬ浅薄な理解であると反論したこと（第八号）、戊辰に際し徳川家を恭順に導いた勝海舟に対し、主戦派小栗上野介にこそ歴史的「正義」と「男子らしさ」があつた、海舟を「怯懦夫の好標本」と断罪する蜷川新の主張（第一号、第二五号）、彰義隊の聖地上野に西郷隆盛銅像を建設することに対する批判と反批判（第一〇号・第一一号）、井伊直弼の銅像建設をめぐる反対派・

く、旧幕臣たちにとつて、『同方会誌』こそが、唯一自分たちが拠つて立つべき雑誌であつた。

読み物としてのメインとなつたのは、講演録や寄稿論文、史料紹介などであり、時には批判はあつたものの、その多くが江戸時代や幕末、明治初年などの事物、事件、人物などに題材をとつていたことも事実である。そして、会員・賛成員自らが記し、語つた自伝・回想録なども歴史の証言としての意味を持つた。三十年以上の時を経ることで、幕末維新は歴史の対象となつたのである。常連たちが寄せた記事の多く

妨害派への反駁（第三号）等々である。

純粋な史実に関する論争としては、御徒士の実態を知らない上級旗本出身の戸川残花の論考に対し、それを詳しく訂正・補足した投稿（第七号）があつた。また、中下級旗本の内実について無理解な戸川の論考に対する矢島隆教の批判（第四四号）、それに対する戸川の弁明（第四五号）、千石以下を見下したような戸川の「広言」に対し、維新時には高禄の旗本にこそ「卑怯者臆病者」が多かつたと喝破する岡本昆石らのさらなる攻撃（第四六号、第四七号）、矢島・岡本対戸川の論争について、戸川の不勉強は間違いないが、「喧嘩」のし方では二人の負けであるとする意見（第四八号）といった応酬もあつた。気分を害したのであるう、この一連の流れの中で戸川は退会している。このように、史実をめぐるものではあつても、彼らの言動が感情に左右されたようにみえるのは、それが本当の意味でも歴史にまつわるものがほとんどであつた。

しかし、現代の我々には、江戸時代や幕末維新期は当然として、明治・大正・昭和戦前期もすでに歴史となつて久しく、『同方会誌』の内容は丸ごと歴史資料たりうる。『同方会誌』の世界には、広範な利用法、多様な可能性が包含されているといえる。

（本書復刻版、第十巻巻末に二十頁にわたつて掲載される充実した解説「『同方会誌』の世界」は全文を掲載したいところですが、紙面の都合により、その後半を一部抜粋して転載するものです。）

のアカデミックな論争ではなかつたことを示しているのかもしれない。とはいえ、現代の我々からすれば、それが『同方会誌』とそこに集つた人々の良さであり、特徴でもあるのだが。

今日、我々が『同方会誌』を手にとる動機の一つは、歴史研究のための文献・史料としての価値がそこに含まれているからであり、戦後二回にわたる復刻版が刊行されるに至つた理由もそこにある。しかし、当時それを編集・発行していた当事者にとつて、それは歴史研究のためだけのものではなく、あくまで会員の相互交流のための道具であつた。そのため、会報や彙報の欄は重要な情報源だったし、時事に関する論説なども知識・教養に寄与するものだったろう。漢詩や和歌を掲載した欄も、愛好者が自らの作品を多くの人々に見てもらふための共有スペースになっていた。多くの会員を擁した規模の大きな団体、旧交会と葵会に機関誌はな



同方会誌 巻末の挿絵

『同方会誌』収録記事一覽(抄)

樋口雄彦作成

【口絵】

公爵徳川家達一家写真
沢太郎左衛門写真
佐久間貞一肖像画
武田成章写真
外山正一写真
徳川歴代將軍朱印
徳川慶喜写真
徳川家達・慶喜一家写真
田口卯吉写真
明治三十九年四月同方会春季大会
兼凱旋祝賀会記念写真
徳川慶久夫妻写真
徳川家正夫妻写真
中島三郎助写真
榎本武揚銅像写真
沼津兵学校記念碑写真
服部綾雄写真
阿部潜写真

【伝記・自伝・人物履歴】

三河屋幸三郎の伝(沢太郎左衛門)
堀織部正自殺始末(沢太郎左衛門)
福井光利氏経歴の終始(六十友道人)

故沢太郎左衛門氏の略歴(丸毛利恒)
佐久間貞一君を悼む(島田三郎)
海舟勝伯(田口卯吉)
陸軍砲兵大佐武田成章君の伝(川口嘉)

故小菅知淵君小伝(早川省義)
故外山正一君小伝
嗚呼外山博士(もち月生)
故沼間守一氏(貫口生)
山田昌邦氏懐旧談(桂園)
清水赤城翁伝(武田信賢)
徳川慶喜公(島田三郎)
維新前後の経歴談(江原素六)
前將軍の御幼時(加藤木斐)
故法学博士田口卯吉君履歴(島田三郎)

福地源一郎氏の略伝及逸話
幕士松岡万の伝(大橋徹笑)
船長福井光利君
傑士中島三郎助君
田安黄門宗武卿年譜(矢島隆教)
近藤勇の略伝並に墳墓(武田酔霞)
田口俊平先生伝(八木繁四郎)
服部綾雄君伝(石橋絢彦)
関老水野出羽守忠友同忠成父子に就て(矢島隆教)
徳川家臣の服部家及養笠之助の事(石橋絢彦)

甘藷先生略伝(榎原萃軒)

敬齋先生五十年祭祀事

羽倉簡堂及び同綱二郎に就て

吹田綱六君伝(石橋絢彦)

一橋家に於ける慶喜公猪飼正為

中村六三郎略伝(中村松太郎)

人見寧君略伝(磯野直諒)

山内堤雲翁自叙伝

佐久間象山先生令閨瑞枝夫人の話(目賀田逸子)

中根香亭先生の人物(小笠原長生)

林董伯自叙伝回顧録

書家戸川蓮仙(小野田亮正)

清川八郎・近藤勇と土方歳三(千葉弥一郎)

山内豊城翁自伝

赤松則良半生談

牧野原開墾の始祖中條景昭外二名に関する伝記追録(西山昌栄)

【幕末の政局・外交など】

幕府軍艦開陽丸の終始(沢太郎左衛門)

故武田成章氏三浦見聞志(武田英一)

合衆国政府の遣日使節記録

ペルリ渡来当時の実歴談(合原機道)

外国使臣の謁見(相陽散士)

江連翁の談片(貫口生)

田辺先生の談話(呉陽散士)

樺太島談判の概要(遠山生)

幕末封建小誌(山口孝直)

新選組池田屋夜襲一件

武士の御用旅行(赤松範一)

佐久間象山先生死体の検視(岡野義之)

三条大橋の制札外し一件(石橋絢彦)

遊撃隊の名簿に就て(西山昌栄)

五大洲巡行記(山内堤雲)

尾蠅欧行漫録(原一介)

【戊辰戦争】

彰義隊発起顛末(本多晋)

彰義隊戦争実歴鈔(丸毛利恒)

大鳥圭介君獄中日誌(丸毛利恒)

開陽丸に於ける勝安房守と榎本和泉守(岳陽生)

戊辰上野戦争の日(まるいち)

戊辰伏見戦争談(宮内洞亭)

幕府瓦解の際の見聞誌(岡本昆石)

美加丸の形見(太田資行)

歩兵差図役頭取故森田貫輔君首級改葬の顛末(山内長人)

函館砲台止戦顛末記(並河一)

上野戦争中の悲劇談(田口倫光)

長藩製作の錦旗(石橋絢彦)

後の鏡(山内堤雲)

上野輪王寺宮を護衛し奉りし時の実況(足田二郎)

日金山と哀史と其史蹟(浦井栄一)

彰義隊の思ひ出(鈴木経勲)

【教育・文化】

松本蘭疇翁談話(林若樹)

国学の中興と徳川氏(遠山談哉)

旧幕の仏蘭西語学校(田島忠親・福田重固)

和蘭留学生派遣に就て松本順先生の書牘(林若樹)

礼と楽(大久保一翁)

大鳥圭介翁と写真術(TK生)

蘭学談(加藤弘之)

如楓家訓(大鳥圭介)

日光廟の大修繕(大江新太郎)

沼津兵学校沿革(石橋絢彦)

川柳東照公御一代記(磯川老人)

静岡学校の沿革

沼津兵学校職員伝(石橋絢彦)

欧式海軍創設時代の追憶(赤松則良)

聖堂学問所の素説吟味の实況(里犬子)

予が英学修業の道中(岡本昆石)

静岡藩静岡学問所職員同小学校

定書(石橋絢彦)

東京市内靈廟建築(大熊嘉邦)

【江戸時代一般】

幕府年中行事自歌合(北村季文)

徳川家八朔祝賀の起因(沢太郎左衛門)

御徒士物語(鈍我羅漢)

存誠齋雜録鈔(林海海)

慶長年中江戸凶考

評定所概記

御目付の威勢(桂園)

江都開見録(丸雪)

御目付の道中(江連加賀守)

転馬の御朱印書(丸雪)

関ヶ原合戦談(内藤耻叟)

鷄鳴旧跡志

水野越前守の尊王(遠山生)

維新前大阪城の結構(永井直好)

神君御消息文(建部元吉)

世のすがた

幕臣の与力(岡本昆石)

江戸町奉行と在職年数(淡哉)

幕臣の同心(岡本昆石)

東金御成に就て(太田資行)

封建時代の間(岡本昆石)

御先手二番組御頭任免組屋敷移

転之覚(岡本昆石)

徳川家康公とウイリヤム、アダ

ムスとの関係(佐伯好郎)

関老松平左近将監乗邑の免職に就て(矢島隆教)

楽翁公に対する誤解(平泉澄)

伝馬町の牢獄(石出帯刀)

御船手の話(向井彦之丞)

旧幕府金座の後日談大坪六二郎

江戸の発達史(安藤直方)

徳川政府の失業救済機関(森貞二郎)

八王子千人衆(天野佐一郎)

茶道御教寄屋坊主(三田村鸞魚)

【江戸の世相・民情】

江戸の火災

飛花落葉(阿羅礼)

端午の節(土館長言)

江戸詞(土館長言)

山ノ手談話会の談話記録(林若樹)

江戸市中の時の鐘に就いて(土館長言)

詞遣ひ(岡本昆石)

江戸時代落書類纂(矢島隆教)

江戸時代の葬式(岡本昆石)

昔の物価(三河武士)

江戸時代のタナゴ釣浦島太郎冠者

江戸時代童謡童話(岡本昆石)

【時事】

海戦実況談(小笠原長生)

軍艦の発達(三好晋六郎)

南洋事情(田島忠親)

独逸之田舎譚(本多静六)

清国福建省見聞録(永井直章)

千島叢談(郡可成忠)

林前清国公使談話(林董)

巴里万国博覧会に就て(河原徳立)

韓国王城拝観の記(吉田勝之)

清国内地の旅行(吉田増次郎)

井伊直弼の銅像に就て(島田三郎)

井伊大老銅像除幕式所感(大隈重信)

渡欧回想談(大鳥富士太郎)

支那とは如何なる国か吉田増次郎

事変下の北京(小林量造)

【漢詩・和歌等の掲載者】

戸川残花、林若樹、山路愛山、鈴木

重嶺、栗本勳雲、田辺太一、杉浦梅

譚、向山黄村、岩瀬忠震、勝海舟、

何礼之、木村芥舟、吉田竹里、乙骨

太郎乙、平井参、川口嘉、依田学海、

中根香亭、平山成信、宮本小一、岡

崎壮太郎、松平康国、三島中洲、豊

島住作、草間時福ほか



祝賀の巻

徳川慶喜公

嶋田三郎 賛成員

徳川慶喜公の公爵を授けられたるは、是迄華族元勳を陞叙せられたると趣を殊にして、全く異例なり、公は家達公が徳川氏を相續して駿遠に封ぜられたる時代より、當世に訣別して隠遁し、家達公が華族に列し尋て公爵に叙せらるゝも、公は與り知らざるが如く、所謂隱居の生活を守り、親族朋友の訪問、又は特別の用事の爲めに、出京せらるゝも、常に静岡の一隅に閑居せられ、公の令子篤君は、特旨男爵を授けられ、公亦東京に移住せられしも、依然華族の隠居を以て待遇せられたり、

然るに今回公が家達公の公爵家と別籍して公爵を授けられたるは、他に類例なき事どもなり、憶ふに、聖上陛下、三十五年前の公の舊勳を思召し、此殊恩を與へ給ひたるなるべし、伏見鳥羽の變に、公一旦罪名を被られしも、事素と公の志に非ず、而して大阪城に於ても、江

(一)



第三十六 (大正二年八月編輯)

譚 筵

傑士中島三郎助君

明治戊辰の年、江戸幕府の臣隸等君家の亡滅せんとするに當り、手を拱して黙止すること能はず、所謂君辱しめらるれば死臣すとの教に従ひ、復た他を顧みるに違なく、相率ひて各地に脱走轉戦身を鋒鏑に委ねしもの擧げて數ふ可らず、而して父子所親數人、

而も地を同うし枕を駢べて戦死せし如きは甚だ稀なり、其之れありしを函館千代ヶ岡砲臺に於ける中島三郎助君と爲す、

君諱は永胤、通稱を三郎助といふ、文政四年正月二十五日和州浦賀の與力郎に生る、中島氏其先濃州中島莊に住す因て氏とす、式部少輔諱は某前田利長に仕へ馬廻役と仕ふ、二男五郎兵衛諱は某前田利長に仕へ馬廻役となり加州新田に於て三百石を領す、其子三郎右衛門定房是を祖と爲す、定房故ありて前田家を辭し、徳川家綱(嚴有院殿)公の時寛文九酉年三月十九日下田町

同方會報告 (自明治三十一年十二月 至同三十二年三月)

論 談

海舟勝伯

鼎軒 田 口 卯 吉 贊 成 員

勝伯は近世の巨人なり、今其訃音に接す、余私に國家の爲に之を惜む、而して余や數々伯に親炙し其高風を仰くを得たり故に私情に於ては殊に痛悼に堪へざるものあるなり、

伯一生の事業は當時にありては殆んど天下を敵とせるものにてありき、然るに伯の末年世人大約伯の國家に大功あるを認め賞賛措かざるに至れり、伯之を觀て去れり、余私に伯の爲めに之を喜ぶ、然れども伯の心事は永遠に辯明すべからざるものあるべし、今其事情を記するは容易の業にあらず、然れども余や親く伯より聞きし事あり、又他人より聞きしとあり、之を序して以て他日伯の爲に傳記を記するものに資するは聊か世

論 談

に裨益なきにあらざるべし、

蓋し伯の人物他に異なる所以は其意見遠く世人に超越するの點にあるなり、幕府の末に當りて憂國の志士大に起り、海内鼎沸せり、然れども其憂國の心は偏に無知に源因するものにてありき、彼等は多く鎖港攘夷を主唱せり、其至誠愛すべし然れども是れ世界の大勢を知らず、通商貿易の理を解せずして、偏に國家が外國の爲に併呑せられんとを杞憂したるに過ぎざるなり、又彼等の或者は開港を主唱せり、是れ亦愛國の情に出づるなり、然れども是れ單に理を悟るに敏なるに過ぎずして、實は足未だ海外を踐まず、眼未だ五洲を見ざるの推測論者に過ぎざるなり、此時に當りて伯は夙に蘭人に就いて航海の術を治め、自ら威臨丸を統督して太平洋を横きりて歸國せり、故に伯より之を見れば鎖港共一種の兒戲たるに過ぎざるべし、是に於て乎伯は海軍兵學校を兵庫に起し、軍艦を操縦して以て鎖港論者の迷を解かんとせり、諸藩は其有望なる少年をして皆此學校に入らしめたり、縉紳姉小路公知公は攘夷論者の巨擘なり、伯之を軍艦に乗せて明石灣を航行せしめたり、姉小路公は之に於て驕然として攘夷の行ふべからざるを悟れり、而して攘夷論者の爲に暗殺せ

葵 影

戊辰 上野戦争の日

ま る い ち 會 員

○朝 (其一)

上野の戦争の時は、私は本所相生町の屋敷に居りました、其の前より私の一家では、女と老人とは皆采地の方へ立ち退き、屋敷に居残つたのは、父と兄と私と弟、並に弟と同年の少年一人、其他は何れも血氣盛んな壯年のもの十數人と、馬二頭のみでありました、其の日私は弟等と三人で、蚊帳の中に寝て居た處が、枕元に方る父の寝間で、始まつたといふ一聲が爲た、愕然として目を覺し、耳を敬て聽きますと、世間は間寂としてゐますが、唯車軸を流すが如き大雨の音に和して、ドンドンといふ砲聲と、恰も豆を炒る様な、パチパチといふ小銃の音が、耳を貫くかと思ふばかりで、其の光景は何んと云つて宜しいか、眞に凄然い事でありました。

○朝 (其二)

葵 影

臙て朝飯を濟ませましたが、私等小供心に、外の景色が見たくてなりませぬから、弟並に一人の壯年者と共に、締め切つてあつた長屋の窓を開けて、龜澤町通りの往還を眺めてゐると、草鞋穿きに高股立、袴を十字に綾取り、太刀の反りをうつて走り行く者もあれば、向鉢巻で小銃を負ひ、草鞋に足を固め手鎗を提げて行く人もある、眞に勇ましく亦物凄き有様であります、其のうち彼方から一人の容貌の逞しい武士が遣つて來たが、何んと思ふたか、私達の覗いてゐた窓の下に立止まつて、共に觀てゐた壯年者に向ひ、徳川家の興敗は此の時である、今貼札が出たから、速に二ツ目橋の南なる彌勒寺へ馳せ集まれと云ひ捨て、逸參に過ぎ去りました。

○午後 (其一)

午後の二時頃でもありましたらう、今しがた上野の山門に火の手が擧つたと云ふ事ですから、私は弟と共に火の目に攀ぎ登つて、西北の方を見渡すと、今しも山門の屋根からは、青い焔が天空を舐るが如く、べらり／＼と閃き上る處で、上野附近の町家は既に一面の火となり、家屋が焼崩れる響の、折々どつと聞ゆる悽慘の有様、有繫子供心にも、残念な様な口惜しい様な心

■ 葵 影 ■

長藩製作の錦旗

工學博士 石橋 絢彦 會員

錦旗は承久の亂に後鳥羽上皇より十人の大将に賜はり官軍の標となされ後元弘の時後醍醐天皇之を用ひ玉ひ錦旗に反抗する者を總て賊と呼ぶ、習俗なりに室町以後絶へて其必要なく朝廷にも其御備へ無しと見へたり然るに慶應三丁卯年薩、長二藩連衡して幕府を倒さんと欲し薩の西郷、長の廣澤、藝の辻等當時蟄居中なる前中將岩倉具視並に權中納言中御門經之等と謀る所あり其年十月十四日薩長藝三藩へ討幕の密勅を下されたり其書に「詔、源慶喜籍累世之威、恃三閩族之強、云々」とあり署名は正二位藤原忠能、正二位藤原實愛、權中納言藤原經之とあり常の詔勅の體を備へたりとは見へず又同時に會桑二藩主を誅戮すべしと仰出され前記三卿の名のみを署せられたり是は原より密勅なれば藩主が參朝して拜受し

たるにあらず其請書には長藩廣澤兵助、福田俠平、品川彌次郎、薩藩小松帶刀、西郷吉之助、大久保一藏六人の名を署し宛名は中山前大納言即前書之樣正親町三條前大納言前書實變中御門中納言前書經之樣岩倉入道前書具視なり之を以て見れば中山正親町の二人は當官にあらず岩倉は隱居落髮なるは明かにしてしかも勅書に署名なく受書に計り有りすとす此時岩倉は長藩に命じ錦旗二旒を作らしめたり是ぞ戊辰の役に伏見に翻りたる錦旗なりと後に至りて知られる此事の大事は今の公爵山縣有朋、昔時は長州の奇兵隊長山縣狂介號含雪の口述に係る懷舊記事卷五に出でたり。

是年十月中慶喜公は土州藩士後藤象次郎の説を納れられ十月十四日即ち前記密勅西下の日を以て大政奉還の事を奏請し翌十五日其勅允を得られたれば討幕の必要なきに至れり之に由りて十月廿一日前記三卿忠能、實愛、經之は勅旨を奉じ一書を薩藩吉井幸輔に交附され島津久光に達せしめ又久光より長藩父子に傳達せしめらる其書に曰く
去ル十四日申達候條々其後彼家祖以來行ヒ來候國

佐久間象山先生死體の檢視

(京都勤役日誌の一節)

舊幕府御徒士目付 岡野 義 之

本稿は舊幕士後外務省屬官であつた岡野氏の遺稿で、まだ世に發表されぬ珍しいものである。岡野氏は先年八十三の高齡で没せられ目下遺稿整理中だが、其うちには世の參考となる記事が多いから追つて發表したいと思ふ。(會員小野田亮正記)

私は水戸藩士であるが、後に幕府に召抱へられて徒士目付となつて、京都警衛の爲出張を命ぜられたが、時、恰かも勤王攘夷の論が沸騰して、京都は諸藩から入込む志士の爲に、随分我々は其の職務を盡す上に苦勞が多く危険も尠くはなかつた。私の出役中の最も大きい事件としては、佐久間象山の斬殺事件であつた。私の勤役日記のうちには、後世の人々に參考となるべき事も誌してあるから、まだ世に發表せぬもので所謂新秘史ともいふべきものを追々と

發表したいと思ふが。今回は佐久間象山先生の死體を檢視したことについて申述べやうと思ふ。

先づ自分の經歷の一端からお話せねばならぬが、今申す通り私は本國甲斐國、生國は常陸の水戸で、嘉永六年六月中旬、相州浦賀表へアメリカの黒船で水師提督ペルリが入港したのは、私の少年の時であつたが、時に我が水戸藩内では攘夷論が盛んに唱えられ、領地の要所々々には海防の柵を構へ、或は陸戰の準備をした。所で年々春季を以て水戸城の北の原野に於て、藩主を始め甲冑を着けて出馬し、これを追鳥狩と唱へ、藩士一同勢揃ひをしたものである。實に勇氣凛々たるものであつたが、何しろ世の中が騒がしくなつたので、一層斯ういふことは盛んにや

『同方会報告・同方会誌』主要執筆者紹介

執筆者以外に、談話者・筆記者・資料提供者なども含む。その時点での故人は除いた。

樋口雄彦

赤松則良 (1841~1920)

旧名大三郎。長崎海軍伝習所で学び、咸臨丸に乗艦し渡米、さらにオランダに留学した。維新後は静岡藩の沼津兵学校一等教授となり、明治政府では海軍造船分野で功績を残した。海軍中将、男爵。同方会賛成員、静岡育英会会長、葵会会頭、遠州学友会会頭などをつとめた。『同方会誌』には没後、「赤松則良半生談」が掲載。

赤松範一 (1870~1945)

磐田、凌雲荘主人などの雅号を使う。赤松則良の長男。中村正直の同人社に学ぶ。男爵、貴族院議員。東京製綱株式会社社長・満洲バルブ工業取締役など、多くの会社で重役をつとめた。幹事として同方会を長く支えたほか、葵会の幹事、静岡育英会の評議員・監事でもあった。『同方会誌』に出てくる「あられ」「阿羅礼」「霰酒舎」などのペンネームも彼のことである可能性がある。

秋元興朝 (1857~1917)

下野高德 (後下総曾我野) 藩主戸田大和守忠至の子に生まれ、館林藩主秋元礼朝の養子となる。明治4年 (1871) 家を継ぐ。子爵。特命全権公使。『同方会誌』には、没後、生前の談話筆記が掲載された。

秋山光條 (1843~1902)

旧名小次郎、号は雪の舎。南町奉行所同心秋山和光の子。平田鍊胤・前田夏蔭に国学を学んだ。維新後は神祇官の宣教使となり、その後寒川神社、出雲大社、三島大社、八坂神社の宮司などを歴任した。著書に『祝詞要義』、『雪の舎歌文集』などがある。同方会賛成員のほか、江戸会会員、東京人類学会会員。『同方会報告』『文苑』欄に和歌が僅かに載る。

朝倉政行 (1857~1928)

岳東と号す。『同方会誌』には丸一のペンネームで投稿。武蔵国で1,000石を領した旗本朝倉豊備の子。東京高等師範学校附属小学校で教員をつとめた。第31号に「略譜」あり。麻生三郎 62

天野佐一郎 (1876~1960)

忠生村 (現町田市) の教師、郷土史家、村長。大正11年 (1922) 八王子史談会を設立、『多摩史談』を創刊。『碧血余話』、『多摩の史蹟』、『多摩陵付近の地誌』などの著書あり。会員ではないが、『同方会誌』には八王子千人同心に関する談話が掲載されている。

安藤直方 (生没年不詳)

号は紫陽。東京市史編纂室勤務。著書に『実業の栞』、『名士の父母』、『小魚と金魚』、『講武所』などがあり。同方会会員。

猪飼正為 (?~1919)

一橋家家臣。同方会会員猪飼正雄の父。85歳没。小野田亮正による談話筆記が掲載。

五十嵐雅言 (生没年不詳)

集古会会員。『同方会誌』では、山ノ手談話会の談話筆記に登場する。

石川道正 (生没年不詳)

雑俎

山ノ手談話會 第一回

林 若 樹 會員

幕府三百年の大平を受けし江戸は、維新の革命に毀たれて、其慣例など、今は僅に舊時の面影を残すに過ぎず、而して維新後の變遷の速なる、予の如き若輩も、所謂名跡の亡失し傳ふるに足るべき事蹟のやがて湮滅に歸せんとするを聞くと二三にあらざ、况んや維新の變に際會したる諸先輩は、往時を顧みて隔世の感なくんばあらず、而して明治も爰に卅有餘年、當時少壯氣鋭の士も、今は鬢髮霜白きを覺ゆるの年輩たり、まして所謂古老は日に月に凋落し、且つ土人の異動甚しければ、隨而土地の口碑傳説逸話等は、今にしてこれを拾集するに非ざれば、漸く滅び行かんこと必せり、爰に山中笑、岡田村雄兩氏と共に、此等の憂の幾分たりとも救はんか爲めに、山ノ手談話會を起し、卅三年十月九日の夜、牛込袋町なる山中氏の宅に於て其第一會を催しぬ、會するも

の坪井正五郎、鳥居龍藏、關保之助、武田信賢、廣田華州、五十嵐雅言、室賀車山、及予等三人とす、今爰に同方會誌を借りて其筆録を公にすることはなしぬ、而して談は別に座を設けて各自交互に述ふるにあらざして、所謂座談に過ぎざれば、興酣に至るや四隅區々の雑談となりて、一々聴取すること能はず、只予が耳に留まりし十の二三を録せしに過ぎず、されば此の筆記録に洩れたる人士も亦談話無かりしにあらざ、予の聞き洩らしによる、讀者之れを諒せられよ、

會名は山ノ手談話會と稱すれとも、山ノ手の事蹟をのみ調査せんとにもあらず、一の考古談話會と見做さるれば可なり、

山中笑氏曰 これより會を開きます、一鉢山ノ手といふ名稱は、下町からさして云つたものでしようが、何時頃から用ゐられたものでせうか、未だ古いものには見受けませんが、享保版の續江戸砂子卷四には、山の手三十三所觀音といふ條があります、又其區域は其條下に牛込、小石川、早稲田、下戸塚、高田、馬場下、市ヶ谷、赤坂、麴町の諸寺が載せてあつて、其次に百觀音參詣供養石佛早稲田宗勝寺にあり、

雑俎

本書は推薦文にもあるように、維新史だけではありません。例えばこの「山ノ手談話會」は、当時の錚々たるメンバーを連れ、補遺も合わせて三十回、二百頁もあり、その中で江戸中の坂にまつわる話だけでも四十頁を越えます。

この「主要執筆者紹介」は、A5版15頁に139名が掲載されています。本書第十巻末および別冊「総目次」に掲載いたします。

3月11日 東日本で地震と津波があったことを夜のニュースが伝えている。あまりにも巨大かつ残酷すぎて言葉を失う。

被災地と自分とのつながりはこれまで皆無に近い。特に太平洋沿岸は通ったこともなく、また会津以外に知人は皆無。

東北はあまりに遠し。

でも亡くなられたお方へ心からのお悔みを手向けると同時に、遠くから一日も早い復興を祈りつつ、仕事三昧の日々。

4月0日 今春刊行する二点の成績は『維新史料編纂会講演速記録』三五五、『回天艦長甲賀源吾傳』二五〇と一年ぶりに予想が当たる。もちろん財政的にはまだ水面下だが……

何年も前から待たれていた『講演速記録』は内容が多岐にわたっており読み易い点でも「並製廉価版」にびったりであったか。

回天艦長が殉死した宮古湾も大被害を被った。こちらでも永年待たれており、これで東軍関係

は長州関係より強いことが、ますますはつきりした。

本書は中村彰彦氏の麗筆で『立見大将傳』に続き「週刊現代」で紹介され嬉しいこと。

4月X日 大災害にもかかわらず、約四百名の予約者中キャンセルはたった一人。

4月0日 今回の二点入荷。どちらも良く出来ており一安心。

大山巖曾孫の大山格氏から、本人が筆者兼発行人で、売価百円の冊子『鯨絵に見る世直し願望』を送ってもらった。

安政大地震をめぐる江戸っ子たちの動きは、その絵も解説も自分が徳川末期、地震騒ぎの下町にいるような錯覚に陥るくらい迫力満点。場所も時代も『同方会誌』の背景そのものだと、直ちに取り寄せ、このたびの出版物発送にすべて無料同封。

5月X日 『鯨絵』はそれだけで終わらせるのはもったいないと、地元マスコミへPRしたところ、朝日、読売をはじめ地方版の特大記事となり、多くの来店者に百円で売ることができた。

郵送ご希望の方は切手三百円をお送り下さい

5月0日 国立歴史民俗博物館教授・樋口雄彦氏より『同方会誌』の「解説」及び「主要執筆者紹介」の原稿来。

これで利用価値倍増となり言うことなし。何とも有難い。

5月X日 「電子本」「大震災」と出版界全体が自粛ムードのとき、全十巻の本を……

それも『鯨絵』の江戸っ子みたいに脇目もふらず前向き一辺倒。「このところ全般に高額書の出版が少ないため、逆に待たれているかも」とばかり突進するとは、震災地から遠くにいる、へそ曲がりならではの独りよがり、狂気の沙汰か？

そういえば、自分が出版を始めたころ宮本常一先生に「三百部路線」について相談したとき聞かされた話を思い出す。

「江戸時代、大きな災害や飢饉など全国で沢山の人が亡くなったときでも、日本人は本が大好きで、江戸や大阪では高い本が最低数百部は確実に売れていた。その意味でも三百部は良い線」と言われたのである。

好都合な話だけは頭に残って

いるらしい。

6月0日 『同方会誌』との同時

刊行をめざして順調に来た一坂太郎他編の『吉田年麻呂史料』であるが、やはり史料物は一筋縄で行かない。難読箇所も多く、時間、経費共ははじめの予定よりまだまだかかりそう。

史料復刻は急ぐべからず。

6月X日 一坂氏に相談の上、年麻呂はこの次になった。

6月0日 今回のパンフも分厚くなり「見ただけで読んだようない気になる」と言われそうだが、絶不況時の大型出版は一寸の油断が命取り。万全を期するため、これ以上の方策がどこにある？

6月X日 『同方会誌』は『旧幕府』よりはるかに入手し難い。危険を冒してまでよくぞ踏み切った」と識者の励ましも多い。揃物の表紙の色を巻ごとに変えるというユニークな試み。日替わり討論の結果、実行に決定。今回もギリギリまで、あれこれ精一杯のパンフとなり大満足。

ともあれ「予告ハガキ」無しのおぶっつけ本番。ゼヒ格安特価でどうぞ……。 Q生

防長路

山 地 域 (26)

自分らしく
生きる
リレーエッセー



松村さん

◆木曜日に掲載します

う抽象的な題名のせいか、内容は、いまひとつ知られていない。

「極少数」直販を貫く

私出版絶不況に抗し、お客さまの声に従って今年秋、その「半額以下」で本書を再復刻する。

そもそも出版は、取り次ぎや新刊店に払う販売費が総売り上げの3分の1を占める。しかし小社は、へそ曲がりな直販のため、その

でも固定読者をつかむことができる。「古本屋から見た本の需要」に目を付けた私は、40年間の手探りの末、珍しい幕末維新史料の専門店となった。

3月の東日本大震災で、価値観が大きく変動している。それとともに、私の目指してきた「極少数出版の世界」も、ほのかに見える

パンフ一つで全国各地に点在する限られた研究者、好事家に喜ばれている。もちろん、期待に反して売れないこともある。しかし昔から「無限の期待と失望の連続」ともいわれるこの業界。えりすぐった一点一点を慎重に出してきた長年の信用によって、何とか生き延びている。

昨年「電子本」騒ぎで、「紙の本」の真価は逆に高まってきた。単なる情報と違い、きちんとした内容のものなら、「電子本より紙の本」は当然のこと。

マツノ書店(周南市)店主

松村 久

本州西端の古本屋が、なぜか、みやびな江戸城遠景の絵を表紙にした、全10巻5200部もある大著の販売用パンフを作っている。その本は、江戸を生きた旧幕臣たちが明治になって集まり、先祖と自らの足跡をまとめ、明治29年から昭和16年にかけて刊行した、貴重な幕末史料集なのだ。

34年前、東京の出版社から10万円以上で復刻されているが、「同方会誌」とい

幕末史料集を再復刻

いるが、「同方会誌」とい